
はじめの いっぱ 騒がしい夜は喫茶店で

ヨネ@ハイテンション

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

はじめの いっぱ 騒がしい夜は喫茶店で

【コード】

N9248D

【作者名】

ヨネ@ハイテンション

【あらすじ】

私は夜の商店街を歩く。今日の街はいつもと違っていた。私は馴染みの喫茶店へと足を運ぶ・・・

私は商店街を歩いていた。

ふとショーウィンドウに飾られた可愛らしいワンピースに目を奪われた。

でも、数秒後にはその前をさっさと通り過ぎる私がいた。

ワンピースは確かに可愛い。

でも、それが私に似合うかどうか

そして、私に不釣り合いなほど可愛らしいワンピースを着る勇氣があるか

それはが大きな問題なのだった。

『勇氣出して可愛い服とか、もつと着とけばよかったかなあ』

街は夜だと言うのに、いまだに喧騒をたたえている

私は一時の静寂を求めて馴染みの喫茶店に足を運んだ

「いらっしやいませ」

いつも通りのマスターの声、いつも通りの店の風景

何も変わらない風景がここにあった

私はいつもの奥の席に座る

この席ははうまい具合にはかの席からの死角になっていて、静かに自分の時間を過ごしたい時にはぴったりの場所なのだった

でも、今日は別にこの席を選ばなくとも一人の時間を過ごす事は安易だった

なぜなら

お客は私だけしかいないのだから

でもそうか、こんな日なのだからそれが当たり前なのかもしれない。
こんな日に、この場所を求めたのが私だけだったというだけなのだ。

「ご注文は何になさいますか？」

暖かみと落ち着きのあるマスターの声。

私はコーヒーと同じくらいこの声が大好きだ。

「あ、コーヒーで」

私はいつものコーヒーを頼む

いつも頼むのは同じものだけけれど

『マスターいつものね』

なんて常連を気取って言うのは流石に恥ずかしい。

「はいはい、いつものやつですね。」

私は申し訳なさそうに小さく頭をぺコリと下げた。

相変わらず私は小心者だ。

その仕草を見たマスターは微笑とともにカウンターの中へと戻っていった。

私はなんだか子供扱いされたみたいで少し腹ただしかったけれど、マスターの笑顔を見るとそんな気持ちもどこかにいってしまうのだった

なぜだろうか……

ああ、父さんに似ているのかもしいれない
と言っても、小さいころに覚えている、もう薄れてぼやけてしま
っている父さんの姿にだけれども。

私が両親をなくしたのは小学校に入学する少しまえの事だ。
交通事故で、両親はなくなった。
たしか、一日中ずっと泣いていた。
大きな声で泣いた、頑張って泣いた。

泣き声が天国まで届くように

そうすれば『泣いてばかりいちゃダメでしょ！』って天国から母
さんがしかりつけに来れる。

そこに『まあまあ、そんなに叱らなくても』って父さんがなだめ
に来てくれる。

そう思ったからだ……

でも当たり前の事だけど、そんな事は起こるわけではない。
そんな奇跡は起こりはしない。

私がそんな事あるわけがないと気がつくまで
泣く事に疲れ果てるまで

数日間は泣いて過ごしたと思う

でも、そのあとドラマみたいに意地悪な人に引き取られるわけ
もなく、何の問題もなく大きくなって東京に出て就職もして、今こ
こでこうしてコーヒーが来るのを待っている

「お待たせしました」

湯気をたたえた出来立てのコーヒーがテーブルの上に置かれる
私はそれをみて、また小さくペコリと頭を下げてみせる

「ゆっくりしてっね」

そして、マスターもまたさつきと同じように、私の仕草に少し笑
いながらカウンターに戻っていく。

ふう〜

コーヒーに息を吹きかける

コーヒーカップの中に波紋が広がる

私は波紋が収まるまで静かにカップの中を見つめていた
この時間が何気ない私の癒しタイムだった

私の吐息で出来た波紋がカップ一面に広がる。

カップのふちに当たっては跳ね返り、四方八方に波紋は広がる。

そして、いつしか消えていく……

ガチャン

窓の割れる音が聞こえた

店の出入り口のガラスに何かが当たって割れたのだった

「やれやれ」

マスターは、ため息をつきながら店の奥からホウキとちりとりを
持ち出してきて掃除を始めた。

「ごめんね、騒がしくしちゃって」

ホウキでガラスの破片を掃く作業をしながら私に声をかける

「いいえ、こんな日ですから………しょうがないです」

「しょうがないか………そう言ってしまうえば、そうだろうねえ」

しょうがないって言葉はとても便利な言葉だと思つ
何かを始めようとしたとき、夢をあきらめるとき

しょうがない

こつこつやけば、全てをそこで終わらせる事が出来る魔法の言葉

両親を亡くしたあの日。

あの日から、私は何度この言葉を使っただろう。

父さんがいないからしょうがない
母さんがいないからしょうがない

私だからしょうがない

もしかすると、私はあの日から

あの泣いて過ごした日から、一歩も前に進んでなんていないのか
もしれない。

踏み出した足が着地する前に、足を戻してしまっているのかもしれない。

繰り返される魔法の言葉。

そして、今日のこの日も
しょうがない日なのだ

「あとどれ位でしたっけ………?」

私が時計に目をやりながらマスターにたずねる

「ああ、ごめんごめん。私も良く知らないんだよ。テレビとかけようか?」

マスターはそう言って、ガラスの破片をかき集めたちりとりをしまいながら、テレビのリモコンを探す。

私はどうしようか迷った

テレビなんて見ないほうがいいのかもいけない、このまま静かな時間を馴染みのこの店で静かに過ごしたほうがいいのかもいけない
そうこう考えているうちに、マスターはテレビのリモコンを見つけて出してしまい、店に備え付けられたテレビのスイッチを入れた
よくよく考えればテレビのリモコンなんて意味ないのだ。今日はどのチャンネルをつけたところで同じような番組しかしていないのだから

テレビの画面がつき、静かだったこの店内に音声が流れる

「各国からの核ミサイル攻撃が数分前に開始されました。着弾まであと3分です。みなさん神に、神にいのりしましょう!」

確かこのアナウンサー、前に対談番組で宗教を否定していたはずなのに………

無神論者なはずのアナウンサーが神に祈る姿はどことなく滑稽だ

った。

「そんなことしても、どうせ意味無いんだろうけどね…….
やっぱり、あがかないと気分悪いんだろうねえ、人類ってやつは」

マスターの言葉はまるで神様の視点からの言葉のようだった
そう、この店の中はある意味、人を達観したスペースなのかもしれ
ない

いまこの世界で唯一の静寂のある場所なのかもしれない。
なぜなら、店の扉を開いて一歩外に出れば、暴徒と化した人たちがあふれているのだから…….

世界の終末

それはノストラダムスのように予告もなく
何の変哲もない日にあっけなく訪れた。

超巨大質量の物体の地球への落下

これだけで、たったこれだけで世界は簡単に終わってしまうのだ。

「そろそろ、核ミサイルが着弾する時間です！」

テレビ画面に映るアナウンサーが十字を切り祈るように言った。

その瞬間、街の空がパッと明るくなった
まるであたり一面に広がる花火のように。

「キレイ…….」

不謹慎だろうけれど、私の口からはこんな言葉が出てしまっていた
暴れていた暴徒も手を止めて空を見ているようだった。

まるで神の光をみる哀れな子羊のように

そして数秒か、数十秒かが経っただろうか……

予想通りの
いいえ、予想などしなくなかった結果がそこにはあった。

そう

何も変わりはしなかった。

全世界全てに花火が瞬いた事以外は何も起こりはしなかったのだ。

テレビ画面の中のアナウンサーは足から崩れ落ちた。

そこでマスターはテレビの電源を切った

「まあこんなの見てもしょうがないよねえ。ははははは」

マスターは私を安心させるために無理に作り笑いを浮かべ、カウンターの中でカップを洗い出した

その手はかすかに震えていた

誰も今の光にほんのわずかな望みをかけていたのだ

かく言う私も例外ではなかった……

でも、これでもう本当にどうする事もなくなったのだ

店の外もいつの間にか静かになっていた

みんな自分の死に場所を探しにいったに違いない、そう思った

私は外のみんなより先にこの場所を死に場所だと決めていた……

……ただそれだけの事だった。

ここなら静かに、いつもと変わらないように、何にも考えないで

死んでいける

そう思ったからだ

ただただ静かな時間が流れた。それはどれだけの時間なんだろうか
まるで静けさの中に私の体が溶け込んでしまいそうになるくさい

カランカランカラン

店のドアが開く音に、溶けかけた私の体が現実へと引き戻された
ドアを開けたのは小さい子供、そう小学生くらいの子だろうか
両親とはぐれてしまったのかも知れない

「大丈夫かい？　お父さんとお母さんは？」

マスターがその子に声をかけた

その子は泣きながら、大きな声でこう言った。

「大丈夫だよ！　ぼく！　ぼく！　あんなの跳ね返してやるんだ！
ぼくが世界を救ってやるんだ！」

涙でぬれたＴシャツで鼻水をぬぐいながらも、その子は胸を張っ
て言った。

「そうか、えらいねえ。坊やが世界を救ってくれるんだね。えらい
ね、えらいね………」

マスターはその子の頭を優しくなで鼻水を拭いてあげた
そんなマスターの目にはその子と同じように涙が……
私の目にも涙が……

子供は何も知らない

何も知らないから

あきらめたりなんかしない

私たちは色んな事を知っている、だから出来ない事も知っている、
無駄な事も知っている。

しょうがない そう呟きあきらめる事も知っている
進もうとした足を戻してしまおう。

だめだ

私は本当はそんな事をしたかったわけじゃない。
本当は前に進みたかったはずなんだ。

怖い？

確かにそれはとても怖い事
恐ろしくて、震えて、痛くて、辛くて、悲しくて、ボロボロにな
る事。

じゃあこの子はなに？

涙と鼻水でいっぱいだというのに、胸を張って前を見ているこの
子はなに！

そうだ

私はあの日から前を向いてすらいなかったんだ。

「マスターお勘定ここにおいておきますね」

そう言って私は席を立ち、テーブルにコーヒの代金を置いた

「いいよ、代金なんて。それよりどこに行こうって言うんだい？」

「この子と一緒に世界を救いに……ね」

跳ね返そう、どんなに重いものだとしても

砕こう、どんなに硬いものだとしても

そして、進もう 前に

私はその子の背中に手を当て、顔を見てこう言った。

真っ直ぐに見据えてこう言った。

「お姉ちゃんと一緒に世界を救おうね」

私の言葉に、その子は大きな大きな笑顔を見せてくれた

私もそれに負けなくらい大きな笑顔をその子に見せた

「行ってらっしゃい。気をつけて」

マスターは私たちを見送ってくれた

マスターの笑顔も私たちに負けなくらい大きく、そして優しく
った。

ああ、大きな光

世界を覆う大きな光

私たちの真上に落ちてくる光

その子が天に向け両手をあげた

この小さい手で、このとてつもなく大きいものを止めようと、跳
ね返そうというのだ

私も同じように天にむけ両手を上げた。
ピンと伸びた両腕の筋の感覚が心地よかった。

つまれる

つまれる ひかり

静寂と光が私と世界を包み込んだ

そして

その中で私はその子の手をとり、足を前に一歩踏み出した

はじめてのいっぱい

私は両親がいなくなってから

はじめて、はじめて

一歩前に進めた気がした……

まぶしい光の中

その子の笑顔が見えた

その笑顔の先に

父さんと母さんの笑顔が見えた……

おしまい

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9248d/>

はじめての いっぱ 騒がしい夜は喫茶店で

2008年11月7日09時22分発行